

〈要旨〉

本稿では、南方熊楠（^{みなかたぐまぐす}1867～1941年）による、夢に関する記述と、「やりあて」（偶然の域を超えた発見や発明・的中。熊楠が用いた言葉）について考察を行う。同時に、熊楠の居た特異な「場所」^{ボジション}に焦点を当て、二つの中間領域＝「中間」と〈中間〉について論ずる。

熊楠は「夢の採集者」であった。隠花植物や粘菌を採集し写生・記録したように、夢に関しても膨大な数の収集と記録を行っていた。そして、夢の記録は熊楠自身のものだけに留まらない。家庭を持ってからは、時に家族や女中が見た夢まで聞き出し、記録している。なぜ、熊楠はこれほどまでに夢にこだわり続けたのか。夢を記録することで何を知ろうとしたのか。また夢と「やりあて」は、どれほど関係しているのか——本研究が射程に据えるものは、これらの問いである。これらの問いへ、熊楠が採っていた（採らざるを得なかった）我々とは異なる「場所」、そしてその間の「距離」からアプローチを行う。熊楠の「在り方」は、他者と極端に（一体化してしまう程）「近く」接近してしまうか、極端に（逸脱行為をとってしまう程）「遠く」離れてしまうかのどちらかであった。つまり熊楠は、「適当な距離」というものを保持できなかったのである。このことは、熊楠による、執拗なまでの夢の探究と深く関係している。

日本神話・民俗学の研究者であるカーメン・ブラッカー（Carmen Blacker 1924～2009年）は、熊楠を「無視されてきた日本の天才」と呼んだ。なぜ「無視」されてきたのか。それは端的に、熊楠の居た場所が、我々の居る場所とは極端に異なっていたからである。我々は、熊楠が天才であったことは知っている。しかし、その「実質」は知らないままである。それは、我々が居る場所を基準にして熊楠を捉えようとしても、熊楠は、あまりにも軽やかに「適当な距離」を突破して、極めて他者から逸脱した場へ、そして極めて自他融合に近い場へ移行してしまうからである。熊楠という天才を本当に知るためには（捕えるためには）、彼の居た「場所」^{ボジション}を突き止めなければならない。

まず序章で、本研究の目的・先行研究・研究の方法・本稿の構成について述べる。第1章では、熊楠の夢の記述方法・記述の経緯を概観する。熊楠が、我々よりもはるかにリア

リティーのある夢を見る、言い換えるならば、夢と現実との境が非常に透過性のある人間であったことを、彼の日記の記述から明らかにする。第2章では、熊楠の夢の記述の中でも、特に多く登場する intimate friend=羽山兄弟に焦点を当てる。そして、ヘーゲルの哲学及び C.G.ユングの元型論を援用しながら、熊楠と羽山兄弟の関係を考察していく。さらに羽山兄弟という、熊楠にとっての「絶対的他人」の喪失が、彼に何をもたらしたのかを論ずる。第3章では、筆者の作成した、夢と「やりあて」に関する「データベース資料」を軸に、熊楠による夢の考察がどのように「事の学」へと昇華し、さらにその後どのように展開していったのかを述べる。この章では、これまでの熊楠に関する研究論文では殆ど取り上げられてこなかった日記（1914～1925年）における夢の記述を、故・岡本清造氏の翻刻を基に解釈する。第4章では、科学哲学者であるマイケル・ポランニー（Michael Polanyi 1891～1976年）の「暗黙知」・「indwelling（潜入・内在化）」、そしてユングの「集合的無意識」の考えを取り入れ、熊楠による「やりあて」が、いかにして可能になったのかを中心に述べていく。熊楠の言う「tact」（磨き上げられた熟練能、あるいは生得的な鋭い感覚）による「やりあて」について、その質の点から考察する。第5章では、熊楠の「やりあて」を考察する際、欠かすことのできない重要事項——熊楠と対象との在り方（自己と他者との「距離」）——について述べる。「採集」と「観察」という行為を通じて、南方熊楠という人物そのものに迫りたい。そして、ヘーゲルの言う「無限性 die Unendlichkeit」をヒントに、熊楠（自己）と粘菌（他者）における「統一」と「分裂」とは一体どのようなものであるかについて述べる。第6章では、「やりあて」が可能になる場＝「自他不鮮明の領域」と、「統一（無）」の場＝「自他融合の領域」の関係を、「通路」の概念（ヴァルター・ベンヤミン Walter Bendix Schönflies Benjamin 1892～1940年）を用いて考察する。以上を踏まえ、終章では、熊楠が夢という中間領域を求めた真の理由を明らかにする。そして「中間」（自己と他者が適度な関係を持てる場所）と〈中間〉（全てが「統一」された場所と「現実界」との間の場所、両項が混在する処）から、我々は何を見出し得るのかを論ずる。

「中間」を知る学が、熊楠の言う「事の学」である。「事の学」は、熊楠の研究方法の根底にあった。熊楠は、夢を「心」と「物」が交わる「中間」の「事」として捉えていた。熊楠はこの「中間」を何とか解きほぐし、知ろうとした。「中間」（事）こそが、「心」と

「物」に関係を持たせる場なのである。

夢は知識や記憶を「合成」・「統合」する。熊楠の膨大な知識や経験は、夢において暗黙的に「統合」され、「ひらめき」へとつながった。熊楠による生物等の「やりあて」（発見）は、しばしばこのようにして成されていた。また、熊楠にとって夢とは、死者と出会う場所でもあった。熊楠は、在外中に亡くなった父や母、そして夭折した羽山兄弟と夢で出会っていた。特に熊楠は、夢を通じて終世、羽山兄弟と交流（交感）した。つまり、熊楠にとって夢は、この世とあの世が混じり合う場＝〈中間〉でもあったのである。その領域では、時間も空間も曖昧になる。そこでは全ての区別が不鮮明になる。生者同士はもちろん、生者と死者も混じり合う。他者（他の生者あるいは死者）からのメッセージを、そこにおいて、ラジオの電波を受信する様に受け取ることができた時、「やりあて」（身近な人の死の予知）は可能になるのである。そしてそのような場こそ、熊楠の思想の核である「南方曼陀羅」で言うところの「理不思議」であった。

また、全ての根源（生命そのもの）と個的生命がその生を営む場は、この「理不思議」＝〈中間〉によってつながっている。そこは両極を結合させる「通路」である。またそこは、人智がかるうじて届く（人間が何とか「自己」を保ちつつ探究できる）処でもある。我々が「生命」を知る際、枢要な事柄は、この〈中間〉の解明なのである。

熊楠は、夢を記録し続けた。しかしその原因やそこに生じる不思議な現象を体系的にまとめることはなかった。あれだけ膨大に粘菌を採集しつつも、それに関する論文らしい論文がないように、夢に関しても数多く記録しつつも、その考察結果を体系的にまとめることはなかった。熊楠はいつも、「中間」に憧れつつ〈中間〉に立っていた。そして、我々にとっては何気ないような夢を採集し、考察することで、熊楠は自らを「中間」へ位置付けようとしていた。彼は死ぬ間際まで、夢を採集・記録し続けたのである。

熊楠による夢への言説を考察することは、人間の「在り方」（自己—他者関係）、そして〈中間〉というものが、いかに可能性に満ちたものであるかを知るための重要な契機となり得るはずである。

——本稿では熊楠の夢を中心に扱うが、その方法は「精神分析」のそれとは全く異なる。

精神分析は夢の世界の一つの次元、すなわち象徴的語彙シンボルの次元を探查しているだけで

あり、この次元に沿ってどこまで進んでも、そこではある決定的な過去がその象徴である現在へ転換されるだけである。

[Foucault 1954, 荻野他訳 1992 : 65]

フーコーがこう述べるように、本研究では、夢の「象徴的語彙の次元を探索する」ことに主眼を置かない。むしろ、夢は「おのれと世界との統一を見いだす精神の運動」[Foucault 1954, 荻野他訳 1992 : 47]である、という立場に重きを置き、考察を進めていく。

参考文献

- ・ Foucault, Michel, *LE REVE ET L'EXISTENCE—INTRODUCTION*, 1954／邦訳：荻野恒一・中村昇・小須田健、『夢と実存』、みすず書房、1992 (Ludwig Binswanger *TRAUM UND EXISTENZ* in “Ausgewahlte Vortage und Aufsätze I”, 1947)

※本研究論文及び付録 CD-R データベースは、平成 20 年度・第 1 回「南方熊楠研究奨励事業」の助成を受けて執筆・作成したものである。